

「背徳の告解～聖職者は野獣に汚され～」

著：夏見レイナ

ill：黒古ショウ

もう夜明け前だろうか。

室内は汗と体液の匂いで充満していた。

「何回いったか覚えてるか？」

九条は愉快そうに佳貴の顔を覗き込んだ。

「……………」

うつぶせのまま佳貴は無言でシ?ツを握りしめる。

そうした恥じらいにまたも欲情を募らせた男は、うなだれて小さくなった佳貴の性器を握り、ゆるゆると擦り始めた。

何度達したかなど覚えていない。だが再び股間が熱を持ち出すのを佳貴は感じていた。

体が暴走し、情欲に歯止めを掛けられなくなっているのだ。

九条はくびれの部分をことさら擦り、鈴口からとろとろと流れ出る蜜を全体に塗り広げるように大きく扱いた。佳貴の性器はまたも勃ち上がり始める。

「ああ……んっ……、もう……あ……」

気持ちがいい。もっとして欲しいと佳貴の腰が揺れたとき、九条は根元を指の輪で締め付けてきた。

「なっ……」

「イきたいか？ でもここを締め付けると射精できなくなる」

酷薄な仕打ちを与えながら、彼はもう一方の手で幹を擦り続けている。

感じさせて、でもイかせないというやりかたに佳貴は眼差しで抗議した。

「だったら……」

ふふ……、と九条は低く笑い、おもむろに佳貴の耳元でなにかを囁く。

「そんな……」

卑猥な科白を聞かされた佳貴は潤んだ双眸を細め、なお悔しげに頬を震わせた。

「おれがいったように、お願いしてみなよ。出したいんだろ？」

男は余裕で佳貴の性器を弄ぶ。これでもか、これでもかと。

「ひどい……そんなセリフ言えるはずが……」

「ない……？」

九条は意地悪く根元の締め付けを強くした。

「ああ……は……」

佳貴は息を喘がせながら、堪えきれず降参する。

「後ろの……穴をいじめて……下さい……三本の指でなぶって……ぐずぐずに……してください……」

「それから？」

「貴方の……ものを……下さい……」

「言えたじゃないか」

男は声を上げて笑った。

佳貴はぎゅっと瞼を閉じる。どこまでも堕ちてゆく自分を疎みながら。

誇りも、神父としての尊厳もすべて失墜してしまった。

それでも体は快楽を追い求めている。

「早くっ……」

堪えきれず佳貴は彼の腕を掴んだ。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。
<http://www.fwinc.jp/daria/>